

と呼ぶようになりました。

いつの頃かこの野上の里に二人の長者があらわれました。彦兵衛長者は野上の上手に屋敷があったので里人は上の小屋と呼び、忠兵衛長者の家は下手にあったので下の小屋と呼んで崇めていました。

ある日、彦兵衛長者と忠兵衛長者が二人で酒を飲んでいましたが、やがておたがいに金の自慢になりました。「俺の方がお前より金持だ。」「いや俺の方が多いぞ。」といつのるばかりでけりがつきません。とうとうどちらが多いかくらべようという事になりました。

あくる朝、彦兵衛長者はあり金を全部カマスにつめて、やっこらしよ、と背負って下の小屋に向かつて歩きました。忠兵衛長者も家じゅうのあり金をカマスにつめこんで、上の小屋めがけて汗をふきふき急ぎました。

山桜が咲きほこり、小川のふちに黄金色の山吹の花が咲き、藪かげから鶯の声がきこえていました。

二人は道の途中でばったりと行きあいました。そしてたがいに無言のまゝカマスをおろすなり顔にたれる汗をぬぐって、金を道ばたにあげ散らして勘定し始めました。

四ツ（10時）から始めて、やがて如来寺の鐘が九ツ（12時）を告げる頃、たがいに勘定を終っ